

## タンザニア セカンダリースクール ヘッドマスター事情

ittuan

幸運にも私は自分の任期中に3人の校長と仕事をする事が出来た。更にこの3人がそれぞれとても個性的だったので紹介しようと思います。

ここでは、私が赴任した時の校長(Mr. B)、昨年 11 月に赴任してきた(Mr. S)そして 2004 年 4 月に赴任してきた(Mr. M)について i) 学校の運営方針、ii) 教育者としての人柄などについて、同僚教師、生徒、町の人などの意見及び、私の独断と偏見に基づいて比較検討しながら紹介していきます。

はじめに各校長について私の知る範囲で簡単に紹介しておきます。

Mr. B: NGUDU Secondary School をオープンさせその後昨年 10 月までの約 14 年間 NGUDU Secondary School の校長を務めた。NGUDU の町では Headmaster といえれば彼の事をさしていた。また彼は jica Office でもやり手らしいということで、彼を知る職員もいるようです。

Mr. S: 2003 年 11 月に赴任してきた校長である。今年 3 月付けで Musoma 方面へ転勤になった。以前は大学の教師だったらしい。Jica office へ私の任期延長願いの手紙を持って自ら出向き、調整員との話の説明に納得してしまい延長願いを取り下げた事は必筆です。

Mr. M: 2004 年 4 月に赴任し、約 1 ヶ月共に仕事をする事が出来た。これまでの 1 ヶ月のあいだに学校のシステムを精力的に改革を行っています。

### i) 学校の運営方針

Mr. B は、学校の設備を整えるために援助を上手く使い生徒、教師への金銭的負担を出来るだけ少なくなるよう彼自身が走り回っていました。彼の努力により、理科実験棟(草の根無償資金協力)、アセンブリーホール(カウンターパートファウンド)が建設されました。また、授業に関しては教師を信用し Lesson Plan を提出させたり、授業のチェックを行うことは無ありませんでした。彼は教師、生徒の声には耳を傾け話し合いによって問題の解決を図っていました。実際に私が彼と共に働いた 1 年半で彼が生徒にパニッシュメント(鞭で殴る)を与えたのは一度だけでした。当時の私にはスワヒリ語が十分理解できなかったためどんな理由だったのかはわかりませんが…。更に、両親のいない生徒や、真にお金に困っている生徒に対しては先ず学校に出て来て授業を受けなさい、お金は払える時に払えば良い、その時に卒業証書を渡すからと言って生徒に授業を受

けさせていたのが印象的でした。実際に彼に助けられた生徒が隊員の同僚としてある学校で教師をしており、いつか NGUDU に戻り Mr. B に恩返しをしたいと話していたという話を隊員から聞いたこともあります。また教師が不足すると彼自身が教壇に立ち授業を行っていた。彼は教師に対しても、生徒に対してもああだこうだと、細かいことは言わなかった、面倒だという事もあるのだろうが彼はよく言えば人を信用して、悪く言えばほったらかしていた校長でした。

Mr. S は赴任当初に NGUDU Sec. の成績を上げると宣言し改革に着手しました。成績の向上のため彼は教育省に働きかけ、教科書、参考書類を調べました。その時に数学と化学の教科書を隊員支援経費によって導入しました。また朝の集合時間を 15 分早め授業に朝礼が食い込まないようにし、解散の時間を 1 時間遅らせてこれまでの 10 periods per day から 11 periods per day にしました。Working scheme や lesson plan の提出を義務付けました。また、彼は全ての生徒に授業料をきちんと払わせ、払えない生徒は払えるまでは学校に来てはならないと学費の回収を徹底しました。いかなる理由があろうとも学費を払えない生徒には授業を受けさせませんでした。そして、Mr. S が校長になってから朝礼に遅刻する教師がいなくなったことは特筆すべきことです。Mr. S はパニッシュメントをよく行っていた。何かにつけて生徒を殴っているのが目に付いたしタンザニア人教師に対してもああだこうだとうるさかったと私は感じています。時に酒に酔っ払って学校に出勤し、生徒を引っ叩いていることもありました。また彼はどんなに教師が不足しようとも教壇に立つことはなく、教師の仕事を Working scheme や lesson plan の提出によって評価していました。彼は、典型的な他人に厳しく自分に甘いタイプの人間だったと思います。

Mr. M は先ず学校のモットーをかかげ、精力的に改革を行っている。彼は Mr.S と同様に Lesson plan、Log book や Teaching scheme の提出を義務付けている。彼は提出させるだけでなく、そのチェックもきちんと行っていた。また、試験の成績の処理もこれまで、ひとつ前の試験の結果が今、配られていましたが、教師を全員学校に呼び出し、教科ごとにグループ分けしてパネル方式で3日で採点を終わらせ、次の週には生徒に配布するという画期的な採点法を導入しました。また、成績の管理もこれまでと異なり、教科ごと、クラスごとにデータが整理され順位までつくといった具合です。これでは各教科の先生達も気が抜けません。更に、教師は必ず教室に80分留まることを指示しており、これまでに行われていた、生徒に練習問題を解かせたり、ノートをコピーさせたりして教室からいなくなってしまうというタンザニアの学校でありがちな手抜きを排除しました。生徒から上がる要望に対しても、きちんと話し合い、出来ること出来ないことを明確にし、出来ない理由を話して生徒の不満を解消しています。勿論、学費の回収は徹底しています。その代わりに授業も学校が始まる初日から開始するという、タンザニアのセカンダリ

スクールでは信じられないようなことやっています。彼は他の教師や、生徒に要求することもかなり厳しいのですが、彼自身も同じようにやっているので何も言うことがありません。

こんな校長たちなのですが、ここで私は何がよいとか悪いと言いたいのですが、それは置いて、校長という学校を取りまとめる大きな仕事がここまで個人によって代わってしまっているのだろうかということについて考えてみたいのです。タンザニアでは校長になってしまえば、それを管理、監視する人間は殆どいなくなります。したがって校長によって学校の運営に若干の違いはあってしかるべきだと思いますが、学費の納入方法、体罰の与え方など、全然違っては、生徒、父母が混乱してしまうだろうし、成績や授業の管理、学校の時間、が校長が変わるたびに変わってしまうのでは教師が大変でしょう。 といつか私が大変なんですよ。

一度体罰について校長 S と話したことがある。

私：『体罰の与え方についてもっときちんとしたルールを作ってくれないか？』

M：『先進国から来たあなたには、よくないことに見えるかもしれない。しかし、この学校運営マニュアルにも遅刻した生徒、授業をサボる生徒……には罰を与えるとかいてあるからな まあ考えてみるよ。』

以上で話は終わってしまったのですが、そのマニュアルには、殴れとは書いていないのではないのでしょうか、スワヒリ語で書いてあって私には良く分かりませんが。まあしかし、自分から率先して殴る人間にお願いした私が間違っていましたね。

Mr. B はこんなことを言っていたのを思い出しました。『タンザニアでもだんだん体罰は止めようという方向に動いている。しかし、この国では、暴動があったり、教師に石を投げる生徒がいたりしてどうしようもないことがある。』

体罰はやはり問題だと思います。Mr. B が言うようにどうしようもないこともありますが、基本的に生徒達は話せば分ると思います。そして、間違いを犯したときの罰が体罰なので彼らの人間性は育たないのです。そして同じ間違いを繰り返すのです。なぜなら、体罰はその時の痛みを我慢すればそれで終わりであるからです。上手くいけば逃げることも可能ですし。これでは、生徒達は自分が間違いを犯して周りの人間の信用を失うことがどんなことなのか理解できずに大人になってしまいます。また殴る人がいなくなったとき、即ち学校を卒業した時自分で善悪の判断が出来なくなります。見つからなければ良い、誰も見てないから良い、殴られなければ良いと考えるようになってしまいます(日本人にもこんな人間はいるが)。最後には酔っ払って仕事に行ったりするようになるんです。

やはりこの国に先ず必要なのはよい道路でもなく、立派な病院でもなく、きちんと善悪を判断できる、自分で自分を律することが出来る人間を育てる教育システムではないのでしょうか？ そのために私達は何が出来るのでしょうか？そして何が出来たのでしょうか？